

# 身近なまちの風景物語(11)

## 安堵する目印

まちを訪れる時、それが旅でも、出張でも、そのまちでしか知ることができない情報を得たいという欲求にかられる。

ガイドブックやインターネットには表面的な情報しか載っていない。まちを歩いて見て廻り、まちの人たちと話をし、等身大で同じ目線の情報に触れる時、やっとそのまちの奥深さに近づくことができる。

海外旅行から成田空港に着くと、ああ帰って来たなと感じる。旅も終わったなと。まだ家まで数時間かかるとしても。

新幹線で東京タワーが見えると、もう帰って来たなと思う。まだ先は長いのに。

帰路の車窓からいつも眺めている風景が目に入ると、無事帰って来たなと思う。と同時に、旅の出来事を思い出す。

最寄りの駅に降り立つと、もうすぐ家だと実感する。あと少しだ。

距離に応じて自宅に近づくことを気づかせるきっかけがある。それは場所だったり、建物だったり、風景だったり様々だ。

そして自宅のあるまちに入ると、およそ最後のきっ

かけとなる目印がある。あの信号の角を曲がれば、あの鳥居が見えれば、もう家だ。人それぞれにこうした目印があるはず。家族の中でもそれはそれぞれ違う対象かもしれない。

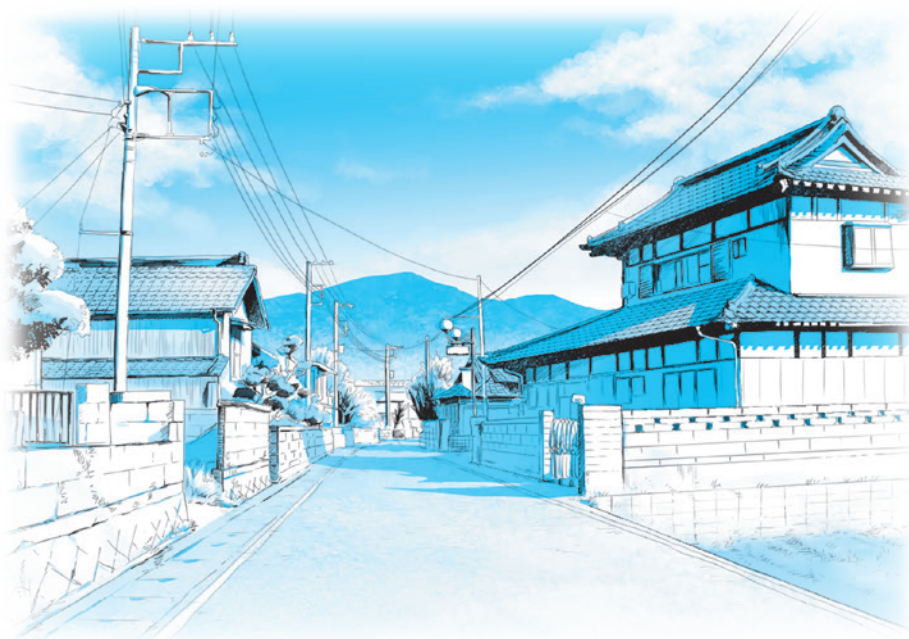
交差点を曲がって、ふと道路の正面に山が見えると、ハッとすることがある。まるで正対する山が挨拶してくれているようだ。いや、微笑んでいるのかもしれない。

おそらくそのまちに住む人たちの多くは、この山がその目印になっているに違いない。この山が視界に入り、そして仰ぎ見て、まちに帰ってきたな、家に帰ってきたなと思うのではないだろうか。それはまちの守り神であり、家の守り神かもしれないと妄想する。

旅行や出張に限らず、買い物、学校、勤め先などから帰る時、日々の暮らしの中でも、家のそばにあるこうした目印が心のうちに宿っているはずである。そうした目印になりそうなものを感じ取りながらまちを歩くと、そのまちに少しだけ溶け込んだ心持ちになる。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学芸術専門学群4年）